LA SCIENZA DEI MAGI

魔術師の科学

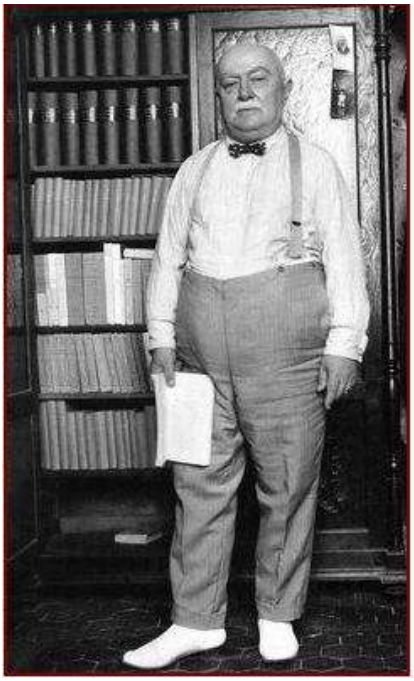
対話編 その $\frac{2}{9}$

Giuliano Kremmerz
vs.
uno scienziato

ジュリアーノ・クレンメルツ
対
科学者

ご自由にお持ちかえりください。

--- **ジュリアーノ、読者への言葉** ---より（一部）



これらの対話は、数少ない友人たちの手によって出版されました。
私は、それらを再読も練り直しもしていないし、私の研究仲間が、適切に編集したもの、私を煩わすことはなく、また再び感じることのできるものでもない。
それは少なくとも後世の人たちへと伝えることを可能にしたもの・そのおしゃべり、何の評価もされていないし文学的美点も持ち合わせていない。

最愛のそしてヘルメス哲学に魅せられたある信奉者・今は亡き彼は、名もなき"友"とのこの会話が維持された速記をするという困難を引き受けてくれた。

その"友"は、学士号を得た科学者でポジティブな実験者、感じがよくなかなか信じない裁判官のように疑い深く、私の古めかしい提示を習い聞き信じない…
それは、私の主義原則に対しても当てはまっていた。
そして今は私たちの考えに転向した…。
その友（科学者）は、命の課題と情愛としての人間精神というものを研究している、そしてある見地からそれは大学に属するところの研究ではない。

対話は普及プランに沿い解説しようとすることを除けば良くできている。
また、普及するのは何か？教理か？信心か？新しくされ続ける宗教か？
そして、誰もそれを考えることはなかった…。
肯定的にはこれは、探究・リサーチであり研究、イデア/理想という何か、意思によって推定されたもの、誰かの中に取り込まれ準備され働き始める、それは飾りではない…。

一般大衆は、夢物語が好きであり、その探究調査への苦労というものはない。
好きで魅了される素晴らしいもの、それを感じ話すということ、そのお話のたぐい…
それは、幻想力に弾みをつけ、そして動き始める…
好きで魅了され希求するもの、その魔法/魔術は、意識的あるいは無意識的なオルフェウス（注６）性であることと関係する：
ひとりの女性に愚かにほれ込むこと、あるいは敵を討つこと、飽くことなき繁栄を手に入れること、病や困難を克服すること、命というものをふくらませること、そこに取り巻きまた献身する全ての人々を専制支配すること…。

スピリティズム/霊的主義が好むものは、何物にも囚われず死をも越える確かな命、それは"幻影"…軽妙で喜びに満ちた、重い物質的肉体の傲慢を必要としないもの、それには働きの限界も煩わしさもない、それは空間から空間へと転移し影響するのです…。

(注６)--- オルフェウスの冥界下り ---ウィキペディアより

オルフェウスの妻エウリュディケは、毒蛇にかまれ命を落とす。

悲しんだオルフェウスは、妻を取り戻すため冥界へと下った。

竪琴の名手でもあるオルフェウスの切ないその音色に、冥界へと続くステュクス川の渡し守カロンも、冥界の番犬ケルベロスもおとなしくなり、冥界の人々は皆、魅了され涙を流し聞き入った。

ついにオルフェウスは、冥界の王ハデスとそのきさきペルセポネの王座の前に立ち、竪琴を奏で、エウリュディケを返してほしいと懇願する。
オルフェウスの切ないその音色に涙を流すペルセポネに説得され、ハデスは、「冥界から抜け出すまでは決して、後ろを振り返ってはならない」という条件のもと、エウリュディケをオルフェウスの後に従わせた。

目の前に光が見え、冥界からあと少しで抜け出すというところで、不安に駆られたオルフェウスは、後ろを振り向き妻の姿を見たが、それが最後の別れとなった…

対話　その２/９

--- 対話の要約 ---

見えない存在たち --- 古来より人々の行為に神々の仲立ちが存在したという信仰 --- キリスト教、保護者としての天使 --- 見えざる守護者への信頼 --- 争いの不可避性 --- 天使たちの戦い --- 大天使ミカエルと堕天使ルシファー --- 国々や人種民族間の争い --- ローマ帝国滅亡と中世暗黒期におけるキリスト教の役割 --- 人間の秘められた能力 --- 私たちの学派と人の成り立ちの概念 --- 平等性：私たちをどう理解するか --- 権利と義務 --- 人間をひとつにする感動 --- 苦痛の伝達 --- 魔術師の単純性は、本能的直観と見えるものとの類似概念にある --- 情熱と忍耐 --- 人類の進歩獲得は魂の苦悩の産物 --- 魔術哲学と熱望 --- 白魔術と黒魔術 --- 私たちの時代への理解 --- 公平性は偏りのない統一イメージとして完成される --- 生命の神秘概念 --- あきらめや失望という病 --- 限りなき人類の可能性 --- 全人類が聖フランチェスコのようにしていたなら私たちは何を得ているか --- 人の内にはルシファーが存在し全ての進歩獲得をおし進めている --- 死後の課題

--------highper link--------

科学者

さあ今日この時となりました、それで、白状しますと、待ちきれませんでした…。

あなた方は前回、私たちのおしゃべりを中断したままで、私はサトゥルヌスという神さまについては全く分からないんですが、それが振り子時計を意味していて時間を進めるとか、それか

ら色んなたとえ話やら何か分からない鳥の話しやらが…。

何とそこでの話の可能性として、私たちには見えない人たちの命という存在が人と同時に存在し関係していて、私たちの五感ではどんな方法でも知りえないということ；…
この様に私たち命のその状態は、この未知の気づかぬ友あるいは敵により好む好まざるとに限らず目の前に展開している…、それはまるでスポーツの様、私たちはそれに興じる子供たちの様…。
それは私には医師のボッリやヴィッラルスたちの著述の民衆に対する地の精や空気の精のたぐい、サラマンダー（＊訳注＊ 伝説上の火の中に住むトカゲ）にも思えます…。

ジュリアーノ

それが誰なのかということはよくわかります…
それは普通に生きている命であり、見知らぬ私たちが気づかない共に生きるそんな存在だと言うロマンスで満ちている…、その中を、人類全ては航海している。

妖精たち

しかしこの物語としての航海が、ある種の現実であったなら…、言い換えれば時にほんのわずかでも部分的にある種の現実であったなら？、…
それはこのミステリアスな介在が訪れ、限定的な偶発性として私たち人の命のドラマとなっていたのだろうか？
もしそれが自由に歩き回り、すべてのそんな推論や直観の多くの想像的な哲学の思考になったのなら、これは奇妙な目を見張るような主張として訪れ人類が普通に受け入れる力になりえるのか…。
そんな古代の詩的概念が受容され、そこに介在していたのが万人にとっての神聖さであり争い、そして民族間の平和であった；…
それらはまさに人類であり、地域間の紛争そのもの、つまりそんな地域のまた敵対する地域のそれ…、これこそがここそこの神さまの庇護と名誉の主張となり、人々の無敵で不死身のあるいは決定的な勝利の存在となって人々に報いて来たのかもしれない…。

この信仰、あるいはこの優れた見方、それが神性/神の性質を帯びた心として、人々の行為の中に訪れた…
それはキリスト教の初世紀から私たちへと延々と続いている…。

それらキリスト教の争いの伝説、そこには楽園の多くの神々が介在していた、部隊で戦う信仰に厚い者たち・対する異教徒たち、彼らは無数に存在している…
さらに後の時代、宗教戦争の時代にも同様の有り様を繰り返していた、同様に、神話のトロイ戦争の時代、さらに十字軍・近代、そして私たちのただ中においてもそうなのです…。

つまり人が常に望んだのは、危機にどう対処するかということ、その社会生活を助けるもの、ご利益にあずかること・天分に恵まれより真実と思える人類にとっての成果を得ること、それ

を可能にする存在…。
こうした願い：そしてもしもこれが存在していたとすれば？
疑念が行き交う人の魂にと、それは置き去りにされている…
何かが、人に不確かなもの・私たちにとって信頼できないものとして投げ返されているということ…。
いったいその者は誰であるか、守護され勇気づけられ、また神・天使・聖母か何かから愛され、人生のとある瞬間に耳をかさなかった者とは？…
人はすばらしい精神的現象を扱うのではなく、ただ単に何かをもてなし応対する、その者は自分で意を決すべき困難な状況を前にして、ただ**感じた**だけなのです…
それは人にとっての多くの絶対に守らなければならない何か、人が躊躇なく この守護を評価すること、おおいなる未知の一断片から来ているもの…。
人は、その深きところ汲めども尽きない泉である誇りというものを持っている。
その人を守護するあるいは共感共鳴する物事の実体を刺激しながら干渉して来るもの、それは、名もなき聖者たちから、また大天使たちの信頼を備え、もしもそれが永遠なる創造主で単純ではなく、その手で心の扉をノックし、人が応対する必要があるのなら、それが人に感心を呼び起こさせる…。
困難で哀れなこの状況において、人はなじみのない未知なるものの介入である**奇跡を感じる**、この奇跡は誰も知りえなかった助力であり、最初のそして元々の思い考え、見えざる偉大なる先導者からの助けなのです…。

それどころか、生き生きとした生身の基本要素であると言える…
アイオーン（至上存在）、この私たちの生活に交錯する世界のある種の存在であり、ふだんはその接触を感じることがないもの…
「親近感や愛情、守られている、あるいは助けられている、好きであるといった感触様式として介在して来るもの…」。
…この課題に対するあなた方のご理解をよく知っておきたいのですが、私どもの神学的哲学的ヘルメス学、その魔術の重要部分をどの様に信じてらっしゃるのか、また死者の魂つまり死後の世界に生きる人たちを信仰し自然に敬うことに結びついているのか、そしてその限られた文化に縛られ、お人好しで何だかわからない押しつけのそれらスピリトを信じてらっしゃるのか、などのお考えを…。

そのモノトーンな見方は、全てスピリティズムでは普通であり、見えぬ実体への根拠なしのうぬぼれのていの言い回し、決して同意事項ではなく、賞賛をもって呼ばれる偉大な名声を得た故人のような人格・人類の誇りのていを示す何かでもない、そしてまた肉体のない霊的なものとなる類のものでもない、いまだ疑問を持たれたことのない誰も知らない何か…
この様にこまごまと働き話し相手となりえる敬意的存在…。

あなた方自身でも、大方のところは普通に確認できる何かである、？！何なんだろうかと…、人が憶測する以上の存在、不可視の守護するものへの信頼…、それは聖人だろうか、天使だろうか、聖母マリアだろうか…と。

一方で、キリスト教は、よき意味で古代信仰の人たちの魂にくぎを刺している、人が生まれるということは管理人としての天使の付き添いのもとであり、私たちへの組織化された悪しき何事かの状況に対し、偉大なる神に始まる自然な庇護であるのかと…。

私たちは、想像しなければならない、それらが人間の心を突き動かす制御できない力・ダイモンなのか、正しくないアイオーンなのか、見えぬ世界の悪いやつらなのかと、それとも、受け入れる必要がある何かなのか、私たちの傍らに受け入れるべきは、運命なのか厳しく峻厳な天使なのか、もしかするとそこに心優しき天使はいなかったのか、それで崖下に転落することはないのか？…と。

このようにして古代からの信仰は引き継がれ息づき、人間は二つの天性によって対立しているということ…
ひとつは善であり、もうひとつはそれに対抗するもの…、と；…
そしてこれはよくよく吟味すること、それにつづき善か悪かということで対立しあうということ…。

もしも警察署長が、人の人生の大道に付き添い、私たちを確実に見守っていてくれるのなら、完全武装の警官の防御がない限り、そこには危うさが付きまとうと言えるだろう…
あなたたち、そっちに行ってはいけない、**財産や命が危ない！**、と大声で叫ぶだろう…。

科学者

この管理人としての天使は、周りに見えない人たちがいる可能性があり、それは本当かもしれないとの勇気を与えるのか…

ジュリアーノ

その自尊や誇りというものは、世界が世界として存在する時から、最もすばらしい「かみさま」という贈り物として私たちのために存在するのであり、それは今だ平安というものを獲得したことのない哀れな死とともにある私たちのため：…
男も女もお互いに理解しようと、自らに正直にすさまじい衝突をしたり甘んじて受けいれたりする…、そしてその激しい渇きは私たちの同様な物事に対しての支配欲求なのです。

この争いは人間の血の中にあるのです：…
この争いをなくすことは、周りの人たちをねじ伏せようとする欲求を捨てることを意味します…。
争いには、情け容赦なき理性・道理というものがある…
そしてこれは停滞しよどむことではなく、何かをやめてしまうことでもない、当然地上から姿を消してしまうことでもないのです…。

人の性格や特性は、置き換えられる必要がある…。

始まります…、これは天使たちつまり大天使たちの争いごとの例として語られて来ている…、その一つの場面…、時に彼らは天から退場させられたのだった…。

大天使ミカエル対堕天使ルシファー、そしてそれは突然の転落劇のように思われている…、けれどもそんな天使たちの争いごとや高みからの転落劇にもどんな神聖な象徴も見い出されない…、それは争いというものがどこか不完全で、自然にそれが命の代償として引き継がれて来ているということ…。
それは人のおごりが引き起こしている民族的うぬぼれ、そのことをヴィーコは良く理解していた…。
（＊訳注＊ ヴィーコ：イタリアの哲学者：『諸民族の共通性に関する新科学原理』の著者）

人類の争い、民族や国家の争い、人種間の争い…、むさぼりの狼から柔和な子羊へと人間の性質を変化させる使命は、キリスト教へと移った…
その責務を負うべく絶対の勝利…、その長い古代ローマ世界の異邦人たちや中世暗黒期…、そこ広大なヨーロッパは狂気と無知のあの知性不毛の状態に包まれていたのだった…
何か偉大な働きの予兆の様なものが姿を現そうとしていた…。
古代ローマ世界、それはヘブライ（ユダヤ）の勝利なのか？…
(＊訳注＊ 一説によればヘブライ人だったと言われるキリストについて、ジュリアーノは言及しようとしている）

…全能の神エホヴァは、その息子に十字架刑で死ぬことを命じ、恨みを自身に引き受け、”現代”ローマ人へと昇華払拭させた…
それは”古代”の彼らが、何の権利もない奴隷の様な民たちであったということ…。

科学者

聖ペテロ、彼は鍵となっていて、反戦主義を産み出し、そして皆が天からのものを待ち望んだ…
人が、地上に自ら作り上げなければならないもの、また同胞たちの為のものを…。

ジュリアーノ

すばらしい！

科学者

しかし現在、人間がキリストの犠牲によってこの緊張状態から解放され自由になったのかどうか、私にはわかりません。
あなた方が私にしたのは、ちょっとの間、もしもに満ちた物語と一緒になる様にして、私たちはその見えぬ存在という商品を前に思案してるってこと…

ジュリアーノ

しかしそれは推測、疑念や疑い…。
と言うより、もしもその真実が人間というもの…、つまりその様な存在で、神々もなくまた見えない半神や触れる事のできない何かも存在しなかったなら？…要するに生きている人の生体組織による何かの力がほとばしり出ていて発散したり何かが醸し出され、その活動環境へと無意識的に影響を及ぼし、またしばしばそれらが対立矛盾する活動の中で、それが目標とする最終的決定的なところの見据えている何かなのか？…

この難解なヘルメス哲学、言いかえれば、命ある人間のコントロールされていない能力を研究する科学は、いろいろな存在の力を見すえ体験で知る真の方法を持ち合わせている…
それは、人間の隠された知ることのなかった能力でもあるのです。

私たちの学派では、人間というものを地球という自然界の性質として見ているのです：…
もしも私たち自身が皆、空気、水、火、土の混合物であるなら：…
もしも私たちがみな組成が同じであるなら、人と人の間には何か影響しあう関係があるにちがいなく、思考、視覚、触覚、聴覚、臭覚で相互関係があるに違いない…
まずはじめに思考が動作や行いの内に翻訳転換され、そしてつづいてそれぞれが、まず外的に完成された何かを感じることができる感覚としてチェックされ体験するということ（注７）。

その他、人に関する見方・到達点においては、様々な統一層が幾重にも重なった入れ物としての統一総合体と考えられているということ…。

当学派としては、人間性/人類は、ひとりの人間のその本性を理解することと言い得るところに到達したのです…
この幾重にも重なり統一体と化したひとりの人間、源を同じくする取るに足らない統一体は、集団を構成するひとつの要素であるということ…。
さらにその相互のつながりというものは、全ての人間の行為の間の理性や分別・道理というものを確認することを要求し、ひとつには、現状、これが無線電話に非常に似ていると言えるかもしれない：…
神経波の放射、電気的発散、エネルギーとしての思考の放射ではないのかと…。

（注７） インド伝来の仏教哲学では人間を構成する５つの要素/５つの動的炎・エネルギーとして、五蘊（ごうん：５つの要素/相の集まり統合体）という捉え方がある。
色・受・想・行・識の５つの方法論、５つのエネルギーが影響し合い心が生まれるとする説である…：
色 material：肉体あるいは物質を含む物的環境、またその働き
受 acceptence：感情や感覚を心が感受する受け入れ作用
想 perception：対象に対し、物事のイメージ/像/印象などを統合する概念作用、統合感覚
行 will：対象に対する意志作用/欲求作用/何かを形成創造しようとする作用/運動作用
識 reasonation：対象を論理や言葉などで識別する作用/認識し判断する作用/reasonation 理由付け/分別思考＝主観と客観の分離
これらの５つの炎、動的エネルギーの動きが心を構成するという考え方、この心も自然界の本性の一側面であるとする説
→ 脳外科医浅野孝雄氏の心と脳に関する研究より

五蘊　５つの炎の要素
「心はいかにして生まれるのか」
NHKで放送された解説動画へ

科学者

これこそまさに人間どうしの友愛というものですね！
しかし、私たちはデマの学説の洪水にさらされ、人間というものは法的にそして義務的に同等・平等であると考えるのです。

ジュリアーノ

同等の、もっとはっきり言えば同一の、実際には人間はその事実において、まったく同一ということはないのです。
みな人間は肉体を持つ、みな同じ動物種の独立体として； しかし人間の生的有機体は、それぞれみなすべて実際大きさが違い、重さ、柔軟性、発達や進歩進化、先祖から受け継いだ遺伝的欠陥、また、受け継ぎ獲得したものが異なるのです。

私たちの学院では理解という恩恵により、**クム・グラノ・サリス/ひとつまみの塩で**（＊訳注＊ ラテン語 cum grano salis：**良識をもって**の意）、その字義どおり文字でではなく、人間が等しいものなのかどうかというひとつの理論を提示しています…。

ある子供たちのクラス、幼くか弱い年代の児童たちにおいては誰もそうではない…
人は、平等や同等について言うことはできる；…
しかしながらそれは間違いではないだろうが肯定できるものでもないでしょう…

その**クラス**という言葉も、鼻たれ小僧たちの寄せ集めではほとんど的を得ていない、肉体的にも知性的にも彼らは互いに違う、肉体や細胞的特徴に限らず、特に進歩の程度が進んでいるのか遅れているのか、未熟期の玉ねぎの様な頭脳では同じではない…。

そのような考えを明らかにし表明することができなくてもと、皆さん私を大目に見るかもしれない：…
慎重に歩を進める必要があります、さもないとあなた方は、この対話で存在の好ましい姿を明らかにすることができなくなる恐れがあります…。

しかし、この事実はもっと注意力散漫な観察者でも確認することはできるのです…。
学校の**クラス、学級**で**多様性とともに数多くの価値や能力**を示すそれぞれの児童に当てはまるただひとつの指標的事実というものはないのです；…
先生方は、その違いをよく理解してらっしゃる。
そして学校の**それぞれの学級、クラス**の中でと同様、外の世界・大人の世界の違いはより際立っている…
カテゴリーや範疇に関するこの**クラス**という言葉は不適切に使われている…。
もしも各個人が、具体的にある種の能力を示すことができていたとして、発達や進化途上の身体的そして知的能力を示す価値において、等しい能力を示す代表的ふたりを何万人もの中から探し出すのは最も困難なこととなるでしょう。
私たちに関するこの事実、たとえて言えば、人々の多様性を指標によって区分けし数えて分けるなどということ、つまりこれは、ふたりを同一範疇として鑑定するなどということには、遠く及ばない…。
それは、物理的な試みのひとつであって、人々の様々な結び付き、彼らの同一性を見るということではあり得ない、…同様、数（字）というものを１０に制限するが如しである。

科学者

つまり、**このヘルメス学派は、平等の権利と義務という主張を否定し続けているということですか**？

ジュリアーノ

先走らないようにしてください；…
この**ヘルメス学派が考えているのは、人類全ての権利と義務は、そこに生きる人間社会の中で平等ですが、それも部分的なもの…**。
これはいっぽうの事実・原理として、文明社会以前では、ミケランジェロ・ブオナロッティ（芸術家）、マルコーニ（無線電信発明家）、レオナルド・ダ・ヴィンチ（科学,芸術,哲学など万能の先覚者）、ジュセッペ・ヴェルディ（近代オペラの完成者）らは、同じように無骨な職人として祖国（イタリア）に貢献している、…彼らと同様、貢献ということにおいて出来の悪い殺し屋メヴィオやおべっか使いのセンプロニオは、何も貢献しないし、できない。
先がけの人たちは、例外的権能や権利を持ち、それに続く人たちは、何も考えなくてすむということ…。

ですから、実践的応用・事実としての平等性は、それにつり合い比例してのみ存在し絶対的価値や相対的価値がある、…個人にとってはそれは、外見上の身体的な特長が他者に対して似ていることに例えられるが、それで**他の人たちに対し同じ**ということではないのです。

科学者

神学的にほんとに微妙！

ジュリアーノ

それでは代わりの明確な事実確認！

学校、施設や社会生活において、多くの個人の集団では、何が明確になるか…
彼らは何を達成し、どういう豊かさに結び付いているのか…、それは人々に関すること ―― 常にどんな価値・より優れた点を持っているのかということ ―― 彼らが持っていて、他の人たちが持っていない才能とは何かということ…。

彼らが正直か不正直か、それが正当に獲得されたものかどうか、それは本当に価値あるものなのかどうかなどと詮索しないでください。
それは道徳律の問題であり、公平さという分別の問題です。

この事実がどのようなものなのかをシンプルに見ていきましょう。

科学者

あなた方が言いたいことが分かるようになってきました：…
全ての人間は、組織を構成する一員という点においてのみ、身体的にまた精神的に平等である；…
しかし、私という存在の進歩、または、構成員としての活動の適合という点で違う…
それゆえ、最も進歩している人たちとそれに及ばない人とでは、生み出すことと受け取ること、義務と権利において平等ではない。

少しはっきりしてきました。

ジュリアーノ

もしかするとそれはもっとはっきりするかもしれない…、と言うのはそれは良いヤツであなた方に報いているのかもしれない…、いずれにしろあなた方もそれが何なのかはっきりさせなければならない、それは人々の間の本質的共同体を可能にしているもので、その何かが平等というものを信じさせている…、それは**心が動くということ情動性というもの**であり ―― それは”感動”を容易にし人に印象を与え理性的にしている ―― それが示されたもの…、そこには異なる水準や段階というものがあり、万人において個人個人は皆、そのまさに同じ家族であるということ…。

その共感的感動というものは、例えば、集団が感じる感情をあるものに限定する…。
ある人に同情するということは、その人を苦しめるものに対し**共に悩み耐えること**を意味します。
それは**感じやすい感情的**状態であり、浸透しあい苦しみに耐え、何かを私たちが身にしみて感じている状態、他人がそこで打ち明けた時の何かです…。

もしも人が苦しみに耐えていたり苦痛の叫びを発したなら、他の人はみなその叫びから苦痛や苦悩を自分自身に感じ取り、まったく自分のことであるかのように苦しむのです。
とある所、とある里であなた方が、とある犬を叩けば、その痛さに犬はほえ、近くの犬もみな敵意のため、ほえうなる…。
また、もしも人が、その非常な苦悩に満ちた魂の叫び声を虚空の本質へと発したなら、魔術師は言うのです、…他の生ける全てのスピリト・魂は等しく虚空の内に存在していて、それを感

じ取るに違いない、そしてこの苦悩によって影響されるだろう…、と。

他者の苦悩や痛みの影響を受けた人達は、それを意識的に自覚することができず、一方で無意識的に悲しんだり他に原因を求めたりして、不安定な感情に落ち入り憂鬱になる。
魔術師は言う：…
君は正確にその影響を特定し評価することができるか…
あの長く苦悩に満ちた戦争が、ずっと今の今まで人類本来の誠実さや、またヨーロッパそしてヨーロッパ以外の人々、またそれに刺激された獣たちにも影響したのか？…と。

いったい誰がそんな途方もない精神的苦悩のかたまりに言及できるだろう？…
そんな測定学的状態の影響は何も把握されてはいない…、１９１８年から今日まで…。
（＊訳注＊ ジュリアーノは、第一次世界大戦終了の１９１８年後に行なわれたこの対話の時代のことを言っている、彼は１９３０年に亡くなっている、その後１９３９年に第二次大戦が始まる…）
果たして誰が確実に、その精神的有害な波に言及できるのか…
それは中毒状態の虚空大気・叫び・死者たちのもの、…それは地球的大気層の多大な群衆を超え行くことはないのか、はるか遠くへと及び、我々太陽系の惑星やそこに息づく他の存在へと及ぶことになるのか？…。
そして結局誰が明言できるのか、…それが限界を超えて行かなかったと、…つまり突き抜けペストの様に悪臭を放つ大気の様に他の太陽系へと…、そしてそこに至ったその反響/影響のこの地上の様々な苦痛は何なのか？…と。

今日公的になされている文化的教育は、ものごとをもっとも単純に理解する準備となっていません：…
ヘルメス的教義（魔術師の科学によって深く切り込むこと）は、あなた方門外漢を転向させる初歩的基礎以前のことです。
幼稚な古代遺物と化したものに対し、よく整理され充分準備された新たな哲学の趣旨であなた方は、導かれ続けている；…
人類には、学識以上の人間の教義、それが全ての人に提供されているということ、険しくも人はそれに従い、日常のほんのわずかな瞬間に「存在というもの」を垣間（かいま）見る、…そのあるものは、子細に検証され日常を超えたものにわずかに触れる…。

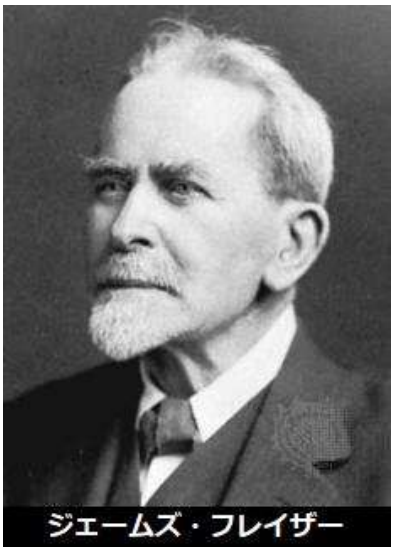
魔術師は原始の生命を超え、可視的事実と本能的直観的物事との間（はざま）の類似概念、その単純性にとたどり着くのです。
ジェイムズ・フレーザー(＊訳注＊ スコットランドの人類学者で神話や宗教の研究家)は、迷信とまだ進歩していない民間小宗教のその素晴らしい収集作品全てで、あなた方にその広大なる実りを与えています。

科学者

実際、あなた方のものは単純すぎるほど単純です。
あなた方が言っているヘルメティズムの教義としての単純なものごとについて考えるたびに、ほとんど私は子供になっていくような気がします！

ジュリアーノ

実際、私たちの哲学は、物事をシンプルに言いえているのではないでしょうか。


ジェームズ・フレイザー

それは現代感覚の神秘主義でも、偽善的に人を変容させる宗教哲学でもなく、原罪の結果でも、神に対抗する卓越した悪魔でもないし、口先巧みな神聖さいっぱいの無表情な聖人人形でもない…。

この哲学がそこに要求するものは、したがって、感情的な抑圧無きものでしょう…。
異性への情熱、豊かさへの情熱、類似の物事への最ものめり込む程の情熱の様なものだろうか？…

しかし、人間の**情熱**がない世界とはいったいどの様なものか？…
苦しみの感情は、私というものが忍耐することを意味します；…
苦しみなき情熱は、感覚や知覚といえるものではない…、なぜなら、**情熱**という言葉に等しいその苦しみの感情それ自体が忍耐を意味するからです。

人類が獲得した小さなものから大きなものまで、全てはそのスピリト/魂の忍耐の結果なのです。
必要性や欠乏感、絶対欲というものは、絶え間なく何らかの行為をなしていて喜びを得ようと何事かを画策している、そんな奴がそれを得るってこと…、それは非常に微妙緻密な忍耐なのです；…
この中に、それら知性や人の心情というものは巻き込まれている。
科学へ命をささげる人たち・探求に献身する者、そして、新しい発明へ挑戦する労苦者たちは、成功への情熱の泉を持ってなかったか…、つまり、持っているのか？…
そして、それを克服しているのか？

そして、熱望や夢の底辺では力づくによる情け容赦なき戦いがあるということ、そのもっと上の領域ではすばらしい科学的成果に対する犠牲と献身が与えられている；…
ガン治療、無線通信の使用、航空路開拓の犠牲者たち、世に信じられていないものの実証のための命をかけた挑戦といった物事は、より崇高な領域での意志に等しい情熱へと向かい、それは、人間の奥底で獲得への欲情を確立し、力ずくでむしり取ろうと同様の物事にあたるのです。

魔術哲学、それは人間のある種の完全な統一統合能力として定位され、このそれぞれの思考や遥かかなたの高位的な願いとしての存在、その本質を呼吸する特殊状態の人間として立ち現れる。
彼らはこの種の哲学の空想力に富んだ最先端であり、白魔術や黒魔術の一派として語られて来た。
白魔術なのか？宗教的なものなのか？豪華なメインディッシュなのか？よくよく見れば金メッキの神秘主義なのか、なめなめしてみれば光ってるが、微妙な表皮でできてる、それが最も神に近いって？…

しかし、その前提は唯一の神と言えるのか、また、ただひとつの善なのか？
善は、その優しさを宿す生き生きとした人たちと結びつくのか？寛大で優しいのか？

しかし、そうであったなら、人は地獄のような苦しみの存在をくどくどと言うことはなかっただろう；…
人が見たかもしれない何か、ある種の天秤・裁きのミカエル、その地獄の大天使ミカエルも必要でなかっただろう…。
寛容とは許しを意味する：それゆえ、死者たちには無用な頼みごと…
人々は天国へ行きたいということ —— 人々は生きている間この地上で悪事に身を染めたんだろうか…。
寛大であることには、犯した全ての過失や罪を清める価値があるのかもしれないが、それが貴い無償の愛・ほほ笑みにゆだねられた価値というものだろうか…。

であるなら、白魔術はこのたぐいの響きを持つ魔術なのか？…
それは、罪を犯した者のほほへの１０倍の突然の平手打ち、キリスト教の神の愛を受ける事：…
もしそれが真実なら、それを甘んじて受け入れるやからは、最初に叩かれているはず…
それが白魔術、それが結論であり現実を創り出すもの、白魔術の…、それは、復讐であり残酷な神の裁き、それこそが確かなこと…、だれも言わなかったが…、それは、その神秘の裁きの神が裁定した無言のやさしさ、慈しみ…。

クイ・グラディオ・フェリト・グラディオ・ペリト（＊訳注＊ ラテン語 Qui gladio ferit gladio perit)**：剣で傷つけるものは剣によって死す**、剣で殺す者は剣で殺される。
こちらは宗教的著述である…。

これはユダヤ的精神です。
この教えは白魔術のものか？…
この至高の神・宗教的魔術は、判決を下す裁判官である、したがって、社会の根源的なもの、歯には歯を、血には血で、と：…
原始的善良性と残酷性、それは寛大な考え方へとつながる…
古代蛮族たちは、恐ろしい彼らの神を創り出していたということ…。

あなた方は、このテーゼ・命題としての主張を、美しく柔和・善良で巧みな詩的洗練された神秘家たちの言葉・著述で織り込み、美化している…
そしてあなた方が読んでいる日常的文体のページは、しばしば想像力を画きたてる詩・信仰と甘ったるい理想としての徳に等しい…。

分析してみてください、何がこの宗教的白魔術の理想で、神の呈しているものをみすぼらしくしているものはいったい何なのかと…
人にとってそれは、何ダースにも及ぶ平手打ちであって欲しいのです…。

魔術哲学が抱く概念は、統合された人間というもの、つまり魔術師である…
その様々な能力を持つ進歩した人類、無限の優しさ徳の力で隣人より秀でた価値を持っているという点であり、ギリシアの影響を受けたローマの闘争的世界というフィールドの、未熟な骨格だけの・おうへい尊大に何してんだとばかりにひっぱたく挑発的なそれ、あるいは人々を足蹴にして張り合うことに代わるものである。

科学者

それが、課題事項…、物事を観察するその観点からの人々がイメージし理解していること。

あなた方自身が、述べていることは、キリスト教の２０世紀であり、ヨーロッパの熟考精神に刻み込まれたもの、そして神聖を理解する手法を持っている…
それは、ご主人様がすべて考えるが如しで、人はそれを待っている…
お父さんが、正式な食事で息子たちを待っているように…
死後の世界で平和裏にそうしている、または私たちを悩まし続けているが如しである。
確かに、神性についてのあなた方の考えは、より現代的で、より心地いい形を成している。

ジュリアーノ

はっきりと理解され美徳に満ちた人間の持つ力を他人のために正しく使うことは、小さな行為でも偉大な業績でも高度な白魔術、純粋なる白魔術で、それは人々が使う資質や能力に含まれているのです。

その逆も同じで、それは黒魔術、もっとも純粋な黒魔術、完璧なる黒い煙に覆われたもの、その魔術師がその力を備える時は、エゴイズムは捨て去られ昇華へと向かう。
それは、最もパーフェクト公正な態度、完璧に統合されたイメージを身につけること；…
正しい紳士・神を信じるスペクトル/分光・メッセンジャーは、つまり偉大なる恵として惜しみなく与える、…この非凡で秀でた巨人は、病弱な人間をその手で握りつぶすようなことはしないということ…。
神さまみたいですか？

しかしそれは、歯には歯の容赦のない神の様、あるいは、言葉巧み勝手気ままな神の様、それはおうへいということか…
それに対するは、集いし天使たち、それで天使たちは不服従を表現するのだろうか…？

魂/スピリトへと光をもたらすルシファー（＊訳注＊ ルシフェル：反逆の堕天使/明けの明星/明かり取の窓という意味もある）、…炎を上げる小さな太陽が、照らし熱し再び呼び覚ますは、その歓喜の熱…
それは、新たな理想を達成するためなのか？…
単純にそれは判決を下すだけの人の価値となる意識なのか、そんなやから達の利益やある種の善を為す方法になるのか、それでまずもって人はいったい何を懇願しているのか？

ここにそんな魔術の二つの概念があり、そこを取り巻くそんなすべての雰囲気の人の暮らす原野が行き渡りある種の本質状態になっている、そこはまさにそれぞれの人たちが創造をなし生活し生き生きと芽吹き、重々しい土を突き破り理性や良識という情熱が堆積しているところ…、そしてそこには苦しみや悩みの種が積みあがり人はそんなうらやみにすがりつきながらその歓喜の実体へと至ろうとする…。

神秘家は言います：…
おお、人間のうぬぼれ(虚栄心、むなしさ)よ！

あなたにとって人間とは、車の様に走るためのものですか？…
飛行し遠方を訪れるためのものですか？…
稲妻の様な電信機の様な機械なのですか？…

人生はかくも短く、その様に急いで苦労しても意味がない。
飛ぶこととはいったい…？

しかし、もしもあなた方が、飛びたかったのなら、創造主はその両肩に大きな鳥の羽のごときものを付けたかもしれない。
走ることには？…

ファスティナレンテ（＊ラテン語＊ Faestina lente ：**ゆっくり急げ、良い結果により早く到るためにはゆっくり行くのがいい、**という意味）。
ゆったりと急ぐ、…どれだけ多くの人たちが競争の犠牲になって亡くなっていることか…。
そんな癌（＊訳注＊ 癒えることのない苦痛という意味もある）など治したいでしょう？
しかしまあもしそんなものを創造主さまがお与えなすったとして、なぜあなた方はそれを治そうとするんでしょう？
もし望まれれば、あなたの神さまは薬なし切除なしのふさわしい意志の行いでそれを消滅させるでしょう…。
医学はある意味人の思い上がりの表れです、およそ神の神聖な力への謀反です。
この世はダイモンで満ちています（＊訳注＊ ダイモン：鬼神・魔・人の心を突き動かす制御できない力・悪魔・悪者・…）。
反逆の堕天使ルシファーはここそこへとおもむきそんな謀反へと野心的イデアの神聖なる能力で暗に示そうとしているのです。
ルシファーこそが人の傲慢に対置している…。

ルシファー（ルキフェル、ルシフェル）は、明けの明星を指すラテン語であり、光をもたらす者という意味をもつ悪魔・堕天使
--- 魔王サタンの堕落前の天使としての呼称

アッシジの聖人フランチェスコについてご存知ではありませんか、その人柄は実直で奇跡を成し善の為に自らをさし出す、その行為は人間性の模範ではないでしょうか？
人は傲慢であり、それは人の最も強力な敵である。
（＊訳注＊ 傲慢と誇り、あるいは、思い上がりとプライド：イタリア語ではともに orgoglio オルゴーリォ と表記される）

画家チマブーエ 作とされる聖フランチェスコ似画像

科学者

この様な神秘家たちの見方、そんな全ての行き過ぎた解釈は、元々先祖代々の精神病質的な形質から来ているもので、私はそれを**自分の意志を持たない不備の病/あきらめの病**と呼びたい…。

この地上にいるということは、この地上で生きているということ、そしてこの地上の命を敬っていない…、確かなことは私たちはそこで命を終えるってこと、そこからもっと純粋な領域へと再び始まる、言い換えればその状態の存在、神聖な喜びへと続いて行く。

ジュリアーノ

正にそうです。

しかし、人はその（能）力がこのようだと考えることなく、そのすべての可能性を獲得しようと歩み出す…。
人は、正義を為し神聖な能力で与えることができると言う；…
それはひとりひとりが、深く隠された自然の秘密を明らかにすることができ、新たな物事を発見・創造し役立てることができるということ…
まだ活動していない要素の能力があり、その自然の何かは人の素質として与えられたということ。

丘陵上に広がるアッシジの街と聖フランチェスコ聖堂　聖フランチェスコ(1182-1226)

人が、宇宙法則を支配することはできないと言う…
それは、宇宙の物理的変化に従属しているからだと…。
サイクロン、地震、嵐、海上の竜巻、稲妻；…
結局、人間の能力は常に生き生きとした自然のそして宇宙の活動的パワーには及ばない。
これは、今日多くが語られ、知られているところです。

明日このとるに足りない小さな動物が意のままに、その天気の良い日と悪い日をはっきり示せないと、いったい誰が保証しますか？
そんな神秘的な領域の中で、そんな集団を構成する魔術原理を通して、時は進みかくもそのような雨に遭遇することがないのだろうか？
そんな物理的な領域の中、人はそんなひょうの砲撃から遠ざからないのか？
最初は小さく、しかし彼らの進歩探求はより大きくならないだろうか？

あなたという人間は、ガソリンで動く車で走り、時速200キロに到達する、そして、600、1000、1500キロに達しない理由はそこにはないですよね？
おとぎ話ですか？
馬鹿げてますか？…
その命というものをあなたは、思考に変える、間接の創造主として…。

アッシジの聖人フランチェスコ、美しき魂、キリストの生ける模範、彼は詩的にその知性に触れている…
その自覚と獣としての人の魂…、そしてその人物は柔和な情熱と共にその生涯へと歩みだす…
その者が与えるものは、すべて善や愛・幸福へと向けられている…。
そして、もしもこの聖人の中の大聖人が、内に理想像としての人間性を作り上げていたなら、あるいはまた、現実の多くの人間性を変化させ創造性を人に与えるよう変化させることが出来

ていたなら、その人同様、今日の人類は見事な様子となっていたことだろう！…
…私たちは、兄弟のおしゃべり屋さん、鳩のお兄さん・めんどりお姉さん・オオカミ兄弟、そしてきつねの姉妹と穏やかに話していることだろう。
（＊訳注＊ 参照動画：インコの気持ちと人の気持ち —— 命のつながり）

そして、航空機は？　自動車、蒸気脱穀機は？　はたまた、無線電信に無線電話は？…
人間の傲慢/誇り、あるいは、聖フランチェスコは、人が達成へと歩み出すのを刺激し鼓舞し後押しする…。
それは真実である…
もしも私たち全員が、あなたと同様に、大砲・剣や毒ガスを持つ必要がなかったなら、あの戦争はもっと起こり得なかったことだろう…
それら全ての人々は、私たちがベッドに身を横たえる様に死んでいる…

私たちの誰も、ワインを２本ばかり飲んだ後で、同様に、消滅するとは考えもしないだろう（＊訳注＊ 人の日常に潜む気づきの欠如を指摘している）。

しかし彼は、修道僧であった…私の記憶が正しければ、彼はその亡がらの灰で何かを作り出した…
多分それは神聖なイデアと共にあり、私たちに与えられている情け深き楽園の神…、この世がより良くなるよう私たちになされていること…。

そして、誰が愛に対してより罪深い行いをしているのか？
そしてまた、それは種（しゅ）の存続と永遠性ということか？
今現在、この世界で何かが為されているが、かの全ての人々はこの状況を学び理解したのだろうか？
民勢統計学者たちには言えることがなく、書き記せることも、弁護できることも無いかもしれない…。
この人間性は、広大なる園であるこの世界であり、人は、野生動物たちと共にあやされ、そして、”分別や自覚を成す愛”と共に導かれているのかもしれない…。
素晴らしく驚異的であり、またすごく野性的に…。
反逆の堕天使である魔王のルシファーは、我々の内に存在し、その天使が、光（＊訳注＊ 光明・精神的光/希望/知性）の運び手である。
彼のその光の松明（たいまつ）は消えることがなく、道を明るく照らし出す、その大いなる歩みが高みへと運ぶのです…。
—— 神への反逆者が…、と？

しかし、人間にとってのそれらの達成は、最優先の魂のはかり知ることのできない英知、世界のその発想概念であり、壮大なる神のイメージ、その返礼/報いとしての何かなのです。
確かにそれらの神聖なる大家族の中にあって、洗練されていない野生の部族やヘブライ（ユダヤ）の全能の神エホヴァ…、そこには遥かなる道が続いている…
地球という小さな球体から、はるか彼方の土星サターン（＊訳注＊ サトゥルヌス神をもじったもの）へと；…
このように全能の神エホヴァと概念化された神との間には、光に彩られたマインド/頭脳の働きの自由があり、そこにはかくも越え難い隔たりがある…

計り知れない深遠・誰にも満たせない海のような何かが…。

科学者

しかし、それで、それらの何事かは理解されても、あなた方が言及し指摘しているように、可能性は常に残っている…
墓の向こうの**あの世**である死後で、一致しないという可能性が…、です。
もしも**死後というもの**が存在しないなら、宗教やスピリティズム/交霊術（＊訳注＊ ここでは世界霊との交信といった意味合い）としては、その描写に困惑してしまう…
人間社会のすべての階層にぴったりと重なり続くものを見いだし、合理的論を交わすとは、正にこのことで、評価しながら私たちを問い正して行くこと…。

しかし仮に、代わりの異教神、ペルソナ（＊訳注＊ ペルソナ：一般的には人格・ここでは個人的自覚、認識や分別心のことか…古くは生命という意味もある）が存在し、それが息をし魂を現し、そして人を創造するのなら；…
…この知性を持った動物が、命を支え共に活動しているのなら、そしてそれで、人がそこから神の御許（みもと）へと行き喜びを味わい、もう再び地上へと降りないというのなら、…この瞬間のこの私たちの論議には、知恵が足りないということ…
なぜなら事実というものは、言葉によって破壊されることはないからです…。

ジュリアーノ

否定はしません。

もし、明日この紆余曲折の証拠が姿を現し、またそのすばらしい不条理というものが訪れ、示され、そこ**斬新さ以上のもの**に至るのなら、その新参者たちの足裏は、宇宙の主（あるじ）の息のかかる所（それは４８時間に及ぶ日、神は途切れることなく息を吹きかけ続けるに違いない（注８））…

（注８）
この部分のジュリアーノの話は、科学者との対話のほんの入り口に過ぎないことを、聖書の「創世記」を引き合いに出し表現しているのかもしれない…。

聖書の「創世記」：最初の二日/４８時間

はじめに神は天と地を創造された。　地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。　神は「光あれ」と言われた。　すると光があった。　神はその光を見て、良しとされた。　神はその光とやみとを分けられた。　神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。　夕となり、また朝となった。　第一日である。

神はまた言われた、「水の間におおぞらがあって、水と水を分けよ」。　そのようになった。　神はおおぞらを造って、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。　神はそのおおぞらを天と名づけられた。　夕となり、また朝となった。　第二日である。

…以上、創世記第一章の冒頭部分、この後、「創世記」は第五十章まで続く。
→ 聖書の「創世記」日本語口語訳参照

それは痛みや乾きに息を吹きかけること、そしてそれから永遠の楽園に再生するために死すこと…

私は、そんな人の理性なき存在は否定し続ける…
そしてアッシジの聖フランチェスコに学び、聖女キアーラ（1194-1253;フランチェスコ女子修道会の創始者）を敬愛します…

しかし、あなた方はそんな時の刻みを見ている…。
それが示しているものは、（創世記の）７日間の内の最初の日々のこと；…
その瞬間には、大天使メルクリウスの能力/ウラタパルが存在する…それは、大天使メルクリウスの様々な素質/才能…
それは愛に身を包まれたヘビ/人の肉体として提供されている（＊訳注：聖書の狡猾な蛇を引用して、人間にとっての「存在/実在/宇宙」は複雑多様に入り組み一筋縄ではいかない事をジュリアーノは言おうとしている）…
なぜならそれは豊穣の神/怒りの神サトゥルヌス、その父なる神は何かを食し、消化し変化させ、その子供たちを養っているからで、その何ものかが、私達の最初の対話に割り込んできたからです…。
そしてそれは、死を語るにふさわしいもの（＊訳注＊ 人間）ではない…

サトゥルヌス神

このようになって、あのもっとも強力な全能の神の力を敬い身につけようとする見地…それを私たちは見て感じこの興味深い課題へと続き、この安息日に結果としてつながっていた、この１３日の日暮れの造けい深き学識のサトゥルヌス神へと…。

科学者

私はこの方(かた)に対しては反感を禁じえません、それは、好きに進みたい時に、邪魔しに現れほんとに迷惑、という感じです。

対話その２　完

付記　2

--- ヘルメス哲学の概論より ---

自然界の力やその法則は、それらを支配し人間と宇宙の関係もそこに含まれている、また大部分は未解決の課題で、現在の人類にとってはいまだ手つかずのまま、科学はその謎を解き研究し最終的理解に達しようと努め、また可能な限り人間たちに実際の利益をもたらそうと試みてはいる。
人間存在のある種の状態については、今日この様に捉えられている、この様な自然の力は純然たる本質であるが、誰もそれを支配することはできないだろう、たとえ人の精神が別の形態で実際の課題を捉えようとしてもである…。
科学的探究は、そんな課題を推し量ることさえできないに違いない、言い換えればまさにそんな目下のモダンテクノロジーや機械的分析的試みに陥りがちな傾向があるからで、しかしより広い見地

で理解し合わなければならない：…
物質をひとつにまとめ上げている内的原因の本質力/インテリジェンスを探求する…、要するにそれが最終的な存在状態である。
物質は研究探求される…、その全ての可能性としては、沈下され推し量ることさえできないあるエネルギーの勢力…、**ナチュラルスピリット**/自然界の精髄/自然の気を構成するダイナミックな命であり、それは物質的な形を成す魂である…。
その沈下堆積や統一物質の昇華が調査探求の場であり、科学が本当に直感しなければならない大元の原因、質的量的にその力は調和の法則によっていて、つまり**宇宙自然界の**インテリジェントな知性である。

より細かく注意深く物質に焦点を当ててみると、人間の中でも自然界の中でも、それは人間的なインテリジェンスで、結果として段階的に思考にならない何かに至って行く、逆に根源的にそれらは様々なイデアでで き上っていて人間の本質と対応し、最終的には人の進歩的展開へと、より共鳴し自然界のサイコインテリジェンス/心的知性として展開する、そしてそこに命をもたらし更なる壮健な社会を産み出し、調和した実際の自然界へとよりシンプルに適合していくことだろう。
誰もその命の膨大複雑な科学からもたらされる社会的知識を無視することはできないし、そんな多くの課題に常に新たな解決策を模索しようと、人類全てはその様な悩みに付きまとわれ続けることだろう；…
しかしそこにはまた伝統としての**絶対科学**も存在する、実務的科学はそれを主張してはいない…、なぜならそんなことは誰も望んではいないし、どれ程それが熟慮され調査されたかも知られていないからで、またそのような精神を科学する人たちはその範疇にもない、要するにこの様な宗教絶対信仰論のフィールドは科学的ではなく、自らを全て可能性の科学として閉じ込めた、それが**統一的真実**である。
それは古代の滅亡した文明の聖職者たちやわずかにそれを知る人たちから伝えられたこの統一的源泉からの真実でその英知である…、つまりそれが民衆を正義で統治し収めていたかもしれないからで、第二にそれが絶対原理のユニヴァーサルな命の調和という真実であるということ。
そんな文明の時代サイクルの中に失われ、そしてまた復活し進歩した原理法則に従い、人の命の進歩へと結びついて行ったものが人のインテリジェンスである。

またそれは神秘的な科学であり、アラビアの不死鳥の祖先伝説であるにもかかわらず、人類の間に常に生き生きと存在し続けている、決して一般のまた俗世の肉体の声として好まれるおしゃべりの人目に触れる何かではない、そしてそれらは反響し再び印象を震わし適合した集団的流れの密集で覆われた”袋”としてまとまる：**サトゥルヌス-月** の魔術概念である。
その様な流体磁気的な鎖の概念として自らを解き放つ、それは人間科学であり調査されて行くに違いない、そして科学的な新たな生理学として解釈され、隠れた何かの生体組織構造やその他の確かな法則と共に同調し受け入れられ、人の弱さや命の変異にある自然の影響力として受け入れられ進歩成長して行くことだろう。
この人間の肉体、生ける物質そして生体組織という存在としてそれは立ち現れた、コズミックなそしてこの地中から生じるそんな感化力によって再び覚醒する、そしてそれは眠らない意識であると同時に記憶され、またそれにさえもこだわらないかもしれない…、なぜならそれが人のインテリジェンスで、人に対抗するある種の意志というものでもなく、どこか雲の層から来るようなサトゥルヌスのあいまいさがそこにはある…。
ただそれが意識というものであり、インテリジェントな自然界、その創造とリズムの法則は、人が垣間見て実際に融合できる様式のナチュラル・ハイパー・エネルギー（＊訳注＊ 時空を超えたエネ

ルギー、次元エネルギー、量子的エネルギー、…、？）状態として受け入れられる存在であり、徐々に分化しより常態化した基本要素の協和音的なヴァイブレーションとなって行く、それが協和一致するインテリジェントな生命であり、相対的に人の進歩となり、自身の意識、つまり首尾一貫した人という”袋”になるだろう。

人の自然な能力や力は、かつては知られ利用され拡大していった、それは蓄積されインテリジェントな意志で**良いこと洗練されたことへ**と向け利用され、また多様な分野へと適合利用された：主なものには治療での人体内物質の**生命力**のバランス回復がある。
それは、活力を実際に生成し、”それ”とはっきり感覚できる様にする…、また証拠を与え何千年間にも渡る根拠なき気まぐれの創造概念の鎖から望まれるものを解放する…、それは抑圧されて来た自然界の生命原理であり、気づかぬ自然法則からのサインでもある。
この力はある種の『自由や解放』・その働きを求めている、またその方向を変え続ける思考はそれ以上の魂の進歩へと…、束縛なき存在状態の認識へと向かって行く…、しかしそれ以上にその存在のエッセンスは活力に満ち心的で、従属的ではなく主導的構造である。
至る所でその課題に創作の花を咲かせ、進歩し様々な人たちの思考の流れの群れとなり、彼らの活動の中心は強化されて行く。
しかしその活躍地に種がまかれるのではなく、それは習慣や統一的伝統として始まる絆として新たに受け入れられ訪れるもの、そこには智への欲求があり進化が加わり、その領域は素早い上昇の道となって行く…。

ピタゴラス・ヘルメス・スクールのジュリアーノ・クレンメルツは、ひそやかなその伝統（明らかではない）を再興した…、まさにそれは時を越え相続され来た確かで価値ある知恵と教えの泉、その本体の方法論は『**光を呼吸する者たちへ**』に結実された…、ヘルメスの子孫たち・良き意志を持つ人間たちの心の内へと実践的マジカルなその絆は訪れた、それはひそかなる科学、魔術的神秘の泉：ただ光へと至る道・その始まり…。
その松明（たいまつ）は常に生き生きとした真実の光、天の都オリンポスの松明…、そこは永遠の情熱・**太陽とひとつになる中心地**、その生き生きとした命を知る者だけの心の内奥の座…、聖職者たちの智によって観察されたインテリジェンスの在り処（か）…
そこにはジュリアーノ・クレンメルツ博士の**全作業と著作**にたずさわりそれに続くグループの人たちがいた、そんなひとつの優れたグループの呼びかけによる連なりによって、ミリアムの絆（＊訳注＊ ミリアムの絆：ジュリアーノの設立したヘルメス治療の研究組織、第３対話の関連個所へ）の彼ら・良き意志を持つ人たちが望んだ実践的な力や能力がそこで試され調査され、神聖なる位階として整備された…、その道はすぐに盛り上がり融合し、人間の進歩的変革、その生き生きとした神さまと共にある最終的本質へと向かって行った。

その『全作業』で広まった著作やそのスクール内での保護によって、そこに新たに加わった人たちは多くの課題に答えようと試みることができた、それは人の精神やメンタリティーが抱く概念の可能性や未解決のまま存続している課題のことである、そしてそれを成し遂げようと活動すること、それを理解し統合することは、神秘的な知恵を糧（かて）として吸収し、愛の知的理解力やその力を大切に守り育てて行くことである。
その黄金のトランペットは、ただひとつの真実を奏でる、それは光を伝える天使たちの**決して失われたことのない言葉**の息によって奏でられ、純粋純真な心の糧となり、はつらつとした精神を呼び

覚まし上昇へと至る道を探し求める、そしてその地からは**私たちの内奥**の日の出へと至る道が続いている、時はまさに**太陽の日**、湧き上がる新たなサイクル・精神の進歩、**その呼び声とそのシンプルなスピリトはその良きことへとその身をささげる**。

それは読み取る人たちが確かに理解し要求していた彼らの特別な関心事への意味や価値であり、心にはっきりと明記される可能性がある…、示されているのはその彼らへの思いとメッセージとしてのきっかけ/動機、これはその道に従い歩もうとする者へと向かうのです…。

バーリにて　　ウーゴ・ダニーロ・チサーリア　１９７６年 １１月

”MAGIA マジア/魔術” の ”MAG マジ/マグ” とは　　：ヘルメス辞典より

生と死の中間状態、人間の内なる自然の最も力強い能力。

— それは科学によって研究されているものではなく、スピリトや精神・霊や霊魂といったものでも、動物や獣たちにまさる部分のそれらのより重要な要素でもない。
ゆっくりと変化進展しMAG/マジの領域へと入って来るもの：
存在の一つのなんらかの状態であり、誰も証明できないし、誰も理解できないもの…

— 動的な意識の変性状態；
自動的なトランス状態/変性意識状態である。
人の奥深く暗いもやの先の強い意志にある全ての具現化と実現。

その **«mag マジ»**（ひとつの強い集中トランス状態）は、英知/月と太陽の要素が一緒になったメルクリウス的メッセージへと変化し直接的コミュニケーションとして、私たちの肉体に揺り起こされ、それらは、宇宙的万物あるいは広大な星的世界/アストラルの流れとともにある。
その強い感覚の振動/ヴァイブレーションは、星界的/アストラルな人間またコスミックな実在の光の世界の現象を決めるものと接し生まれたものでもある。
（至上存在、永遠不変の愛、衝動や刺激/神経的共鳴と関係する）

第９話までご紹介してまいります。

ご意見、ご希望、ご指摘などお気軽に → メール

this dialogue　http://cosmotravel.ever.jp/SdeiMD2.html
Home Page　http://cosmotravel.ever.jp/index.html